

この人に会いました

※7・13水害、10・23大震災と打ち続く災害に、湯沢町からもたくさんの方々が救援ボランティアとして活躍しました。今回は、社会福祉協議会の呼びかけに応じてボランティアに加わったお二人を訪ねました。

高野 清美さん  
(浅貝)



「川口の田麦山での私たちの仕事は、食事作りが中心でした。」

駒形 虎次郎さん  
(神立・堰場)



「私も水害で中之島、震災では田麦山へ、共に3〜4日行きました。あちこちの被災地で何回もボランティアをやっている人（ペシャリスト）といってもいい人たち（彼らは見えや功名心のない純な人たちでした）」と、県内の我々のようなボランティアとの

取れないのです。そんな時また社協が声をかけてくれたので参加できました。

とびとびでしたが、合わせて7〜8日くらい行ったでしょう。朝5時半に起きて、家の食事の準備をして7時半までに社協に集合です。からちよつと忙しかつたけど、家族の協力があつたし、旅館が暇な時でしたからできたことでした。

最初に小千谷に入った時は、避難所の体育館にはお年寄りしかいませんでした。私たちは何をしたいか、お年寄りのかわからなかつたけど、お年寄りの話は聞いてもらえるので、私たちが涙を流しながら聞きまわりました。困った時に駆けつけてくれる人がいるということだけで、

喜んでもらえたようです。

一ヶ月以上連続して詰めたのは湯沢町だけだったので、田麦山では湯沢は高く評価され感謝されていた。ボランティアといふものは、受け入れてくれる方々の喜びが伝わってきて、私たちの喜びももらえるものだから、とっても充実感がありました。

心のケアというボランティアなので、一緒に泣いて話を聞いてあげるとか、被災者の置かれていた状況を分かっているだけでも大きな力になっていくのだと感じました。湯沢町でも、災害ボランティアの輪を作ってもらい、いざという時に備えていただきたいと思っています。」

協力関係もうまくいって、一体感のある活動ができたと思います。私の田麦山での仕事は、たくさん届けられた救援物資を集落ごとに世帯数を確認しながら分ける仕事と、キノコ工場の後片づけなどでした。キノコ工場では、ほこりを吸った人が肺炎を起すという事故もその前日にありましたが、幸いそれへの対策も考えた上で仕事をする事ができました。

今回はお手伝いに出かける側だったので、私たちの地域でこのような災害が発生した時にはどうするかを、いろいろ考えさせられました。

災害が起きてからではなく、普段から災害に対応する組織を作っておくことが大事だと思います。総合的なボランティアの組織を作って、その下に福祉と

災害とイベントに対応する下部組織を作り、時に応じて様々なシミュレーションをしてみる必要があるのではないのでしょうか。その際、行政がいろいろな活動経験を持つ人材をつかみ、そのネットワークを作っておく必要があります。そして時々ボランティアの活動の機会を作り、そのネットワークを常に組み立て直しておく必要があると思います。今こそその必要性をみんなが感じている時なので、この機会を逃さず、行政を主体とした地域一帯の組織づくりが急務だと思います。

非常事態にすぐ対応し、頼りになるのはやはり行政です。町は、ボランティアの受け入れやその業務の分担・指示などに経験を積んだ人材を育てておいてほしいですね。そうでないとい

ざと言う時に混乱をまします大きくするばかりです。県内外（湯沢町も含む）のいくつもの自治体では職員を派遣していましたが、それは災害時のノウハウを学ばせるためだったようです。私も今までは会社の仕事でいろいろ町のお世話にもなつたので、災害ボランティアの組織ができるようだったら、こんどはその一員としてお手伝いしたいと思っています。」

※12月24日の夜、中越大地震の被災者を励まし連帯の意を表すキャンドルが、町内のほとんど全戸の戸口に灯されました。湯沢町も被災者の役に立ちたいとする気持ちで充溢していること、それを示しているようで、美しい灯火でした。

（佐藤 南雲（和）広報委員）

編集後記

「絆（きずな）」

新年明けましておめでとうございます。

それぞれ思いを託して新年を迎えられた事と思います。昨年中に本県を襲った、水害・台風・地震では多くの被災者を出し、人々の心に深い傷跡を残しました。

インドネシア・スマトラ沖地震では世界的にも類をみない未曾有な災害となり、世界中を震撼させた出来事として報道されています。地震列島といわれる日本では敏感に反応も対応もされますが、世界では地震も津波も知らない国があるという。

津波被害を受けたタイで、被災者への支援を呼び掛ける鎮魂歌「アンダマンの涙をふいて」がヒットしている、という記事がありました。歌詞に「サシミは知っていたこともなかったツナミ。地上の楽園アンダマンを突然襲った天災。数え切れない死に世界が泣いている」……。

人ごとではないが、今冬の湯沢もまるで元気がない。この現状がいつまで続くのか心配である。

湯沢町再生が課題の年、その一歩として議会が活気溢れる場となる事を願って一年のスタートにしたいと思っております。今年も議会だよりのご愛読よろしくお祈り致します。

広報委員 今村 定一

編集

湯沢町議会  
広報対策特別委員会